



二極俱有の罨

Beyond Good and Bad

永田円了

物事がうまく運んだ日、人は「ああ、今日はいい日だった」と、つぶやく。逆にビートルズの歌“*It's been a hard day's night.*”のように、「ひどい一日だった」などと、過ぎた時間を評価する。果たして、その日が、いい日/悪い日、というレッテルで片づけられるのだろうか。

今回のテーマ、『二極俱有の罨』とは、人が無意識に、いたって勝手に、二極のレッテル - いい vs.悪い、善 vs.悪、好き vs.嫌い、愛 vs.憎しみ、最近では、“勝ち組 vs.負け組” などなどを頭の中でこね回し、シーソーゲームを繰り返している姿を言っているのである。人間なら皆持っていると思われるこの二極思考(首から上の思考)から、何とか脱出できないだろうか、というのが今回のテーマの目指すところである。

英語でいうなら、**Beyond Good and Bad** (善悪を超えて)となる。



動物の世界はどうか、肉食獣のライオンなどの動物には善も悪も存在しないという。人間だけが、善悪の二極世界をもつとされる(サル学の権威・河合政雄)。ライオンは生きるために、他の動物を殺して食べるのであって、決してあいつが憎いから殺して食べるのではない。

また霊長類であるサル達は、水場をめぐる他のサル集団と争いを起こす。これも動物界での自然の摂理であろう。ところが、争わないサルがいるという。アフリカ、エチオピアの高原に住むグラダヒヒである(河合政雄氏の発見)。本来争いが起こるはずの場面、このグラダヒヒは、実に穏やかで思いやりのある態度を取るといふ。



サルから進化したとされる人間は、幸か不幸か、“争うサル”と“争わないサル”両方のDNAを引き継いだ。この二極の芽が、人間を時には天使にも悪魔にも仕立てるのである。換言すれば、私たちの意識の中には、マザーテレサもヒトラーも両方とも存在するということである。

では、この『二極俱有の罨』からの脱出は可能なのか。可能である。まず第一にすべきことは、この事実をしっかり見据え、今の自分の行動は“天使”からのものなのか、それとも“悪魔”からのものなのかを意識することである。でもできれば、両極端に走らず、例えば、今日一日が終わった時「今日はいい日だった/ひどい日だった」と言う代わりに、「ああ、今日一日が終わった、ありがとう」と、その日の出来事に評価を加えないで心にしまい込むことができれば最高である。

次の事例は、“社会のルール”と“個人の自由”の狭間で苦しんだ青年の物語である。



Into The Wild 2008年アメリカ映画

1992年の夏、24歳の青年の死体がアラスカの荒野で発見される。その死に顔があまりに美しく、幸せに満ちていた。一体この青年に何があったのか。

物質文明に背を向け放浪の旅に出るクリス。名前もアレキサンダー・スーパーランプに変え、アラスカを目指す。

偽りの自分を抹殺すべく、そして精神の革命を成し遂げるため、敢えて過酷なアラスカの荒野に一人身を置いて見つけたものとは、...

Happiness Only Real When Shared.

幸福が現実となるのは、それを誰かと分かち合ったときだ! と気づいて世を去る。

“エゴは偽りの自分を食って生きている” - エックハート

エゴの正体とは、恐れ・貪欲・支配(fear, greed, control)である